

# AWAPURADIO

アワプラジオ通信

2016.12

アワプラジオ通信は千代田区社会福祉協議会（東京・九段下）の中にあるちよだボランティアセンターに置かせていただいています。また、アワプラジオやメンバーがかかわるイベント等でも配布しています。バックナンバーがウェブサイトでダウンロードできます。置き場を提供して下さる方も随時募集しています。発送を希望される方もお気軽にご連絡ください（連絡先は裏面）。

<アワプラジオとは> 認定 NPO 法人 OurPlanet-TV で出会った仲間、2009 年に開局したミニ FM、インターネットラジオ局です。名称は OurPlanet-TV の略称であるアワプラにちなんでいます（アワプラとは別々の団体です）。

## 『Abe's VIEW』 Vol. 24 「行雲流水と顔施」

デジタル大辞泉によると「行雲流水」とは「空を行く雲と流れる水。物事に執着せず、淡々として自然の成り行きに任せて行動することのたとえ」のことをいいます。そして行雲流水を実践し、雲と水のように一カ所にとどまることなく、常にかたちを変えながら流れるように旅を続ける修行僧が雲水です。

川は流れるからこそ清らかさが保たれ、水は同じところで滞留している限り淀んで、やがて腐り果てていきます。変化を恐れないなどと言うと、挑戦や闘いなどといったことをイメージされがちですが、変わっていくことは今や弱者のための生存戦略ではないかと思えます。多様化や細分化の激しい今の時代、変わらないでいることのほうがリスクではないでしょうか。

行雲流水を実践する雲水のように生きていきたい。そして仏教には顔施というものがあります。これはいつでも笑顔でいることで周りの人を明るく幸せな気持ちにする、お金がなくてもできるお布施というようなことです。私は少しでもそれを実践するために、まず普段の買い物で支払いをするときは、必ず店員さんへ「ありがとう」や「ありがとうございました」ということを心がけています。それはお店の人が言うべきことと思われるかもしれませんが、自分のために働いてくれるすべての人にありがとうという意味です。そんな言葉を誰かに対して発するとき、仏頂面になる人はまずいないでしょう。

変化とはいっても、人生というものは足し算ばかりではどんどん重くなって動きも悪くなるでしょう。それはまるで古くてスペックの低いパソコンに、最新ソフトを次々とインストールしようとするようなものです。だから薄皮を剥がしていくように、毎日笑いながら、少しずつ生まれ変わっていったらいいと思うのです。そして最期は玉ねぎのように芯も残らないという生き方（行き方）が理想的です。（阿部浩一）

先月号に掲載したクラウドファンディングプロジェクト「児童養護施設と高齢者施設を繋ぐ幸福のベンチを熊本から東京へ！」はおかげさまで目標を上回る 219,000 円で達成することができました。応援ありがとうございました。

■プロジェクトのページはこちら [https://readyfor.jp/projects/smile\\_kumamoto](https://readyfor.jp/projects/smile_kumamoto)

## ヨムヨム旅行記 アタカマ砂漠で宇宙体験（チリ）



ブエノスアイレスでタンゴショーを楽しんだ翌日、私たちはチリのカラマヘ向かう飛行機に乗っていた。都会の建物群が途切れると、雪を冠したアンデス山脈が眼下に広がった。その高さに、突然大地が近づいたような錯覚を覚えた。窓に広がる稜線は滑らかで美しく、どこまでも終わりなく続いていた。山脈を超えしばらくするとチリの首都サンチアゴに到着する。更に飛行機を乗り継ぎカラマヘ向かった。

カラマヘは標高 2260M のところにあるアタカマ砂漠の玄関口。いかにも南米らしい広大な大地に飛行機は降りた。空港からアタカマの街まではさらに車で 3 時間荒野を走る。空は濃い水色。雲は僅かに空を漂うだけ。アタカマ砂漠は年間数日しか雨が降らない乾いた大地だ。岩だらけで荒涼とした赤褐色の大地をずっと見ていたら、地球ではない別の惑星に放り込まれた気持ちになった。

標高が高いため空気が薄いと聞いてはいたのだが、油断した。翌日参加した、標高 4500M にあるタティオ間欠泉を訪れるツアーの間中、私は酷い頭痛と戦わなければならなかった。4500M は富士山よりも更に 1Km 以上も高い。大きく息を吸っても肺が膨らまないし、少し歩くだけで身体が地面にめり込むように重く感じる。ついには顔面蒼白、観光どころではなく私だけ早々に車に戻った。かつて経験したことのない身体の変化に戸惑い、ここは地球か？と疑いたくなった。

アタカマ砂漠はかつて海の底だった痕跡を示す塩の大地がある。さらに月の谷と呼ばれる、まさに月面を思わせる谷もあり見所も多いのだが、やはり醍醐味は星空だろう。1 年のほとんどが快晴、そして標高のおかげで薄く透き通った空気、人口灯のない街。これだけの条件が揃えばまるで宇宙空間にいるような星空が見えるはずだ。もちろん私も期待し、頭痛をこらえて夜空を見上げたが・・・なんということか、その日は幸か不幸か満月の夜だった。爛々と月が輝き、その美しさと引き換えに、私の宇宙旅行は呆気なく終わってしまったのだった。（浅香友里）

## ブリジット・ジョーンズの日記 ダメな私の最後のモテ期 (2016年・イギリス/アメリカ/フランス合作) シャロン・マグワイア監督

レニー・クラヴィグ コリン・ファース パトリック・ディンプラー

ブリジット  
ジョーンズの日記  
ダメな私の最後のモテ期



ブリジット・ジョーンズは、バリバリ働くニュース番組の敏腕プロデューサー。恋に仕事に奮闘してきたのに未だ独身。「ぼっち」で歌うパースデー。仕事は絶好調でも恋はさっぱり。彼氏とは別れ、かつて愛した浮気男ダニエルは事故死。そんな切ない笑いから始まる人気シリーズ第3弾です。

でもあれよあれよという間にモテ期へ突入しちゃう(笑)。野外フェスで転んだのを助けてくれたのはジャック。婚活サイトで成功した起業家で、明るく優しいロマンチスト。ノリがいいアメリカ人。同じ頃、忘れられない元カレのマークと急接近。生まじめな弁護士です。二人に惹かれるブリジット。そしてまさかの妊娠が発覚。「どっちの子かわからない」お腹の子のパパとして張り合いを始める2人。とことん正反対な2人の中で「ケンカはやめて」状態なブリジット、おいしい役どころです(笑)。

15年続くシリーズだけに、時代の変化もさりげなく仕込んでいきます。三角関係、高齢出産、SNS、「江南スタイル」、同性愛や亡命者の人権……。

世の中は日々変わっていても、ブリジットは変わらない。何があっても立ち直りはやたらと早くて、どうにか切り抜けてしまう。学習しなくたっていいのがブリジットなんだな(笑)。時事問題をユーモラスに取り上げていて、ハッとさせられる。案外「どうにか」幸せになれるのかもと思わせてくれるラブコメディです。そして、意味深なラスト…このシリーズまだ続のかしら？(宮内華子)

## 『GREEN BOOKS』 ~本の紹介~

### 情報参謀 (2016年7月) 小口日出彦 著 講談社現代新書・821円

情報参謀  
小口日出彦

これが新時代の  
情報戦だ!

2009年の下野から再び4年連続で政権を奪還した自民党。その内幕下では、テレビとネットのメディア戦略も戦略的に駆使し、政治情勢分析が徹底裏で行われている。14日1日、自民党をテーマ分析で聞いた人物が初めて明かす、その内幕。  
自民党、政権奪還の深層

自民党は1955年の結党以来、現在までほぼ全時代にわたって政権与党の座にあり続けている。その強さの秘密についてはさまざまな見方があるが、いろいろあってもまずは政権の座にあってこそだという執念のようなものが、その源泉となっているのであろうと想像できる。93年、自民党は結党以来、初めて野党となったもののその後一年足らずで政権へ復帰する。55年体制下において少なくとも表向きには対立を続けてきた日本社会党との連立政権、しかも自分たちの中からではなく、その社会党の党首(委員長)を首班候補に担ぐことによって。そうした無節操としたたかさには目を見張るものがある。

本書は2009年の総選挙で自民党が大敗し、民主党政権が誕生してから12年の総選挙を経ての政権復帰、13年の参院選勝利で自民党が衆参ともに多数を獲得するまでの4年間、同党の情報戦略を担った著者による記録だ。民主党政権が一定の成果を上げながらも迷走し、仲間割れをして支持を失っていく裏で、これほどの分析からテレビとネットを駆使した情報戦が仕掛けられていたのかと驚く。野党だったからこそ取り組む余裕があったと思えないこともないが、自民党が世の中の変化をつかみ、それを受け入れる懐の深さを思う。

筆者は自民党幹事長も経験した某氏が他党の議員が一通り発言を終えた頃にかけて各地から上京した農業関係者を前に、その心をわしづかみにするようなあいさつをする場に居合わせて、これはかなわないなと思ったことがある。本書を読みながら感心するほどに、そんな自民党に代わる受け皿のない今日の不幸を思わずにはいられない。(阿部浩一)

### 過去の紙面から アワプララジオ通信の前身「ヒトトナリ」に掲載された原稿を再掲します。

私は、もし尊敬する人は誰かと訊かれたら、すぐに59歳という若さで亡くなった母と答えるでしょう。私の母は、瀬戸内海の小さな島の生まれで、10人兄弟姉妹の真ん中くらいだったそうです。母の生まれた1915(大正4)年当時は、母の父、つまり私の祖父が手広く塩田(海水から塩を取り出す場所や施設)をやっていて裕福でもあり、母は当時では珍しく、女学校まで行かせてもらい、得意だった英語の知識を活かし、貿易会社へ就職しました。フランス人のその会社の社長が私の父です。

父は私が5歳のとき、亡くなりました。母は私を連れて山口県下関市にあった実家に戻ったのでした。当時の下関は、半農半漁の田舎の町で、ましてや実家はすでに母の弟である長男の代となっており、母はずいぶん肩身の狭い思いをしたはずです。母は周囲から勧められた再婚話にも耳を傾けることなく、昼夜黙々と働き、一人娘である私の成長を生きがいとしてくれました。

とても手先が器用な人で、料理も編み物も玄人はだしでした。そして、石部金吉と言っていいほどの真面目さのせいもあったのでしょうか。1975(昭和50)年2月、台所で料理中に脳出血で倒れ、あっけなくこの世を去ってしまいました。

私は母に苦勞はかけても、親孝行らしきことは何一つ出来ないままでした。母が亡くなった後で家を整理に行ったとき、台所には私と当時交際中だった夫が帰ってくるからと腕をふるっていた作りかけのハンバーグが。押し入れには隠すようにしまってあった手編みのベビー服。預金通帳には「自分の葬儀費用に」というには、あまりに高額な預金残高。母が親不孝ばかりだった私に残したものでした。(「母」2013/10/1・阿部美知子)